

魔法使いの教えを受けて 00LF-1038 紙透崇

幼いころからずっと、私は妖精や怪物の出てくる物語に惹かれていた。魔法に憧れつつけてきた。神話や昔話などを読んでいると、心がわくわくと躍りだす。だが、それらは誰もがオトナになる過程で捨ててきてしまうものだ、捨てなければならない、恥ずかしいものなのだ、と思いこんでいた。いまふりかえれば、そう思いこまれていたのだとわかる。それらの物語は、ひとくりに子供の読み物として、どうしても軽んじられることが多かった。私はだいに大好きなあの妖精の名を、怪物の恐ろしさを、語らなくなっていった。大学に入学し、文学や芸術の勉強をはじめてからも、私はしばらくそれらの物語への消せない情熱を、隠していた。

しかし、2年生になって、初めて巖谷先生の授業に顔を出した際、そんなつまらない誤解は、見事なまでに打ち砕かれた。忘れもしない。映画『シラノ・ド・ベルジュラック』を見た次の回のできごとである。この映画が選択されたこと自体にも私は驚いていたが、先生はよいと思った感想を紹介すると言い、私はさも難解で論理的な感想が選ばれるのだらうと思って、メモの準備をした。ところが、やおら先生は両手をかかげ、「シラノのばか！ でもカッコイイ！」という学生の感想を、抑揚をつけて読みあげたのである。私はしばし呆気にとられてしまった。次に、急に腹の底から笑いがこみあげてきたのを覚えている。そうだ、これでいいのだ。だって、どうしようもないのだから。興味のない分野でハリボテの論理を積みあげるより、本当に好きなことを隠さずに思うままやってみようじゃないか。私はこの瞬間、そう思った。おおげさであるかもしれないが、私はこのとき初めて、文学や芸術というものに本当に興味を持てたのだと思う。

そのような体験をもとにして、私は今回、巖谷先生の4年ゼミに参加した。もちろん、愛してやまない妖精や怪物たちにすこしでも近づきたいという思いを持って。授業が始まってまだ間もないころだ。先生がメルヘンについて、その考えの片鱗を語ってくれたとき、私がずっと惹かれてきたものたちは、けっして恥ずべきものなどではないどころか、重要なキーワードにさえなりうるということを知った。私は心が生き生きとしてくるのを感じた。心のなかに消えずに住む彼ら・彼女たちは、私をもっとすばらしいところへ連れていってくれるかもしれない。そんな予感を抱いた。しかし、私はどうやってその予感を現実のものとするのか、まったく見当もつかなかった。

そんなときである。目黒の「鎮海楼」か「とんき本店」で食事をしている最中だった。思いきって先生に、「妖精や怪物に興味があるんです」と切りだしてみた。すると先生は待っていましたがとばかりに、「それならケルトをやってみたらいいんじゃないかな」と返してみせたのである。そのとき私は正直に言えば、ペロー昔話集について聞いたかったのだ。それで「妖精や怪物」と切りだした。私はケルトという民族の文化に、興味など持っていなかった……はずなのだが。なぜだろう、私はそれ以来、聞けば聞くほどケルトにはまってしまい、いつ

のまにか、もうすっかり抜け出せなくなってしまっていた。そして、この予期せぬ出会いが、意外にも私を妖精や怪物へとみちびく道しるべとなった。私の心をとらえて離さない現象、「変身」についても、ケルトは私に大きなヒントを与えてくれた。私の意図とはかけ離れたところから、次々に私のもとへとすばらしい魔法がおりてくる。まったく、私にとって先生は魔法使いであったとしか思えない。

私は卒業論文に、自分の旅を描いた。そう思っている。私にとってこの4年ゼミに参加した1年間は、まさに旅だったと思う。いま思いおこすと、今年とりあげられたすべてのテーマが、私の描いた旅のなかで生きているように思うのだ。

ランボアのいくつかの作品の解釈は、私に「永遠とは何か」というひとつの重要なテーマを与えてくれた。まさにそれは「楽園とは何か」という問題にもつながるものであった。最後の授業であつかわれたランボアの『コント』とブルトンの『ナジャ』についても、愛とは変身することである、という結論にいたったように思えるが、まさにそれを体現してみせたものこそ、『眠れる森の美女』ではないか。彼女は愛によって、人間から森の妖精へと変身したのだと私は考えている。楽園や変身を卒論で扱うにあたって、ランボアやブルトンがおおいに私に力をかしてくれたことは、まちがいない。

別の回のテーマである「庭園」は、私にとって憧れてやまない楽園のカケラであった。森という不思議な緑の存在を感じさせるものでもある。また、私が大学2年の夏をすごした町アンジェ、滞在していた寮のすぐとなりにあるアンジェの城が授業でとりあげられたことも、驚きだった。ラベンダーが咲きみだれる屋上の中世風庭園、暗闇に浮かびあがるすばらしいタピスリーたち。そこに描かれた不思議ないきものは、いまでも私のなかの怪物たちに少なからず影響を与えている。偶然という名の魔法を感じずにはいられない。

「人形」や「舞踏」の回は、いつでも自分は自分でしかないと思いこんでいた私に、衝撃を与えた。私とは誰か？ 私が私でなくなる瞬間、私はどうなってしまうのだろう？ これらの疑問を抱かなければ、私はケルトの転生思想や変身について、深く理解することはできなかったと思う。土方巽のダンスの映像を見せてもらったとき、私は言いしれぬ衝撃を覚えた。また、ある回に見た映画『マイセン幻影』に出てくる磁器の人形たち。無機質であるのに、どこか人間よりも生き生きとして見える。あの白くなまめかしい肌を、私は忘れることができない。

はじめのころにとりあげられた「アニメーション」、とくにヤン・シュヴァンクマイエルの作品は、私に「変身」に対する決定的なイマジネーションを与えてくれたと思う。まさに肉体の輪郭がゆらぎ、互いに溶けだす様子。それが、あそこまで見事に視覚的に感じられるものかと、私は驚いた。彼の作品世界はグロテスクなものを多分にふくんでいるし、性的な要素が強く感じられる。理想的なユートピアにはほど遠いものだと思う。だからこそ、楽園に近いものなのかもしれない。

そして、「ケルト」をめぐる何回かの講義。まるで、私が参加した4年ゼミの授業、この1年間すべてが私ひとりのためにあったのではないかと錯覚してしまうほど、いま、それらは私

の血となり、肉となっているような気がする。この一年間で、私は生まれかわれたのではないだろうか。少しだけ、変身できたのかもしれないと思う。確証はないが、そう信じたい。これから、私の旅はいったいどこへ向かうのだろうか。行き先など、まったくわからない。けれど、ただひとつだけ、たしかなことがある。

私はこの4年ゼミを、一生愛してやまないだろう。

2004年1月